

町小だより

平成30年
9月5日
No.623
御免町小学校

自分の言葉で

校長 藤井 聡

『猛暑』『異常気象』・・・この夏は、何度もこの言葉を聞きました。日中の校区内巡視でも子どもたちの姿を見かけることが少なかったと職員からの報告がありました。厳しい夏だったようです。

2学期が始まり、学校には子どもたちの声が響いています。静かに、子どもたちの成長や未来について思いを馳せています。

子どもたちが社会に出て、大勢の中で「声」を発し、ぶれることなく目標に向かっていくためには、「自信」をもたせ、自ら学ぼうとする意志を植え付けなければならないと考えています。

教授型の授業ばかりを受け、「型」を教え込むことに終始した教育を受けた子どもたちは、見た目は良くても、小さくまとまっていきます。また、「型」を身に付けても、ほめてくれる教師がいなくなれば、その子は歩みを止めてしまいます。そして、自信をもつこともできなくなります。これを改めたい。自分の頭で考え、自分の言葉で話をする子どもを育てる教育にシフトしていくことが、真に「自信」をもった人間、自己実現のために努力できる人間を育てることにつながるのではないかと考えています。

授業中や職員室への入退室の際など、言わばフォーマルな場面において子どもたちが使う言葉は、教師から教えられた「型」に沿ったものが多いように思います。たとえば、学習の場面では、「私は、〇〇さんに質問があります・・・」「私は、〇〇だと思います。理由は、△△だからです。」などです。これは、子どもたちの話し合いの場を教師があらかじめ想定し、話し合いをしやすいようにつくられた「型」にはめて討論をさせようとするためです。また、人前で発表をする際などには、あらかじめ「型」に沿った原稿を書かせ、暗記をさせて発表させることが多々あります。

このように「型」を習得させていくことには、メリットがあります。それは、正しい言葉を用いて、人にわかりやすく伝えるためのノウハウを得るということです。しかし、いつもこのような受け身な態度では、「自分で考える」という力が育ちません。「こういった場面では、どのように話せばいいのか。」と考えることもなく、人から与えられた言葉を用いているだけでは、失敗することが怖くなります。そして、いつも上手に話をしなければならないというプレッシャーを抱えながら生活することになります。また、人に何か尋ねられても、首を傾げたり笑みを浮かべたりするだけで、きちんとした対応ができなくなってしまいます。

以上のような考えから、『自分の言葉で』を合言葉にして、教育活動を展開してまいります。拙い表現でも良い。つかえながらでも良い。自分の頭で考え、絞り出すようにしてやっとの思いで表出した言葉の価値を私たち大人が認めることが、一人の子を大切にすることにつながると考えています。